

ネパールにおける花卉産業の現状と文化的背景

安井俊樹・根本和洋*・南 峰夫*・北村嘉邦

信州大学農学部食料生産科学科

*信州大学大学院農学研究科機能性食料開発学専攻

要 約 ネパールにおける花卉産業の現状を明らかにするために、信州大学のネパール農業実習で訪れたカトマンズ、ポカラ、マルファ、ナラヤンガートにおいて調査を行った。主に切り花を取り扱うフラワーズデコレーターでは切り花に関して、主に鉢花を取り扱うナーサリーでは鉢花に関して、品目、価格、販売形態および流通経路について聞き取り調査を行った。マリーゴールド (*Tagetes* spp.), アジサイ (*Hydrangea* spp.), ユリ (*Lilium* spp.) については特に注目し、認知度、用途、嗜好について聞き取り調査した。調査結果をもとに、ネパールにおける花卉産業の成熟度、花卉と文化、宗教との関係について考察した。

キーワード：花卉産業，ナーサリー，ネパール，ヒンズー教，フラワーズデコレイター

諸 言

後発開発途上国に分類されるネパールの国民一人あたりの年間 GDP は約700ドル程度である¹⁾。ネパール農業研究評議会 (NARC) のもとに多数の国立農業研究機関が設置され、自国の食料の安定的な供給のため食用作物の栽培や育種などの研究および技術普及活動をしている。しかし、商業目的の花弁を研究する国立の研究機関はない²⁾。また、ネパールにおける食用作物の栽培と利用に関する調査報告は多数あるが³⁾⁴⁾、花卉については見あたらない。そこで、本研究では世界最貧の後発開発途上国に位置付けられるネパールにおける花卉産業の現状を調査した。調査は平成26年度ネパール農業実習期間中に実施した。

まず、ネパールにおける花卉産業の現状を把握するため、販売されている花卉の品目、価格、販売形態および流通経路について聞き取り調査をした。次に、ネパールで最も需要が多いマリーゴールドおよび本学部の蔬菜花卉園芸学研究室で研究されているアジサイとユリについて、その認知度と用途、嗜好および調査場所での有無を調査した。これらの結果から、ネパールにおける花卉産業の現状を明らかにするとともに、その文化的背景を考察した。

調査地および調査方法

1. 調査地

平成26年度ネパール農業実習 (2014年9月14~27日) において訪れたカトマンズ、ポカラ、マルファ、ナラヤンガートで実施した (図1)。

2. 調査方法

(1) 販売と流通

市場から花を仕入れて販売するフラワーズデコレイターと呼ばれる小売り店舗についてはカトマンズ市内4店において聞き取り調査を行った。種苗を仕入れて育苗し、苗や鉢花を販売するナーサリーについてはカトマンズ市内の New Sun Flower Nursery とポカラ市内の Rakshya Nursery において調査した。また、切り花を卸す市場についてはカトマンズ市内の United Flora において調査した。調査項目は、取り扱っている切り花と鉢花の品目、価格、販売形態、仕入れ先、および別の都市への流通経路の有無と具体的な経路についてである。

(2) 品目ごとの調査

ネパールの主要な花卉品目であるマリーゴールドおよび本学部で研究されているアジサイとユリについて、認知度と用途、嗜好を現地住民に聞き取り調査した。また、訪れた場所にアジサイとユリがあるか探索した。

受理日 2014年12月15日

採択日 2015年2月6日

結果および考察

1. 販売と流通

(1) カトマンズ

a. フラワーズデコレイター

フラワーズデコレイターは卸し市場から切り花を仕入れて販売するという販売形態で、日本における一般の生花店に相当する。切り花はバラ (*Rosa* spp.), グラジオラス (*Gladiolus* spp.), カーネーション (*Dianthus* spp.), リコリス (*Lycoris* spp.), ガーベラ (*Gerbera* spp.), ユリ, スターチス (*Limonium* spp.) 等の品目が販売されていた。価格は1本あたり20~150ルピー (1ルピー=0.9円) で、スターチスのみ10本ほどの束単位で販売されていた (表1)。切り花は店外に置かれた水の入ったバケツに入れられており、日本の生花店で見られるような冷蔵ショーケースは使用されていなかった (図2 A)。切り花用の冷蔵貯蔵庫は後述するUnited Flora にのみ備えられているとのことであった。実際にカーネーションを一本購入したが、ラッピングされることなくそのまま手渡された。フラワーズデコレイターには鉢花が売られておらず、切り花とそれをオアシスに挿して作るアレンジメントが売られていた。オアシスの上面に切り花を挿して鉢花のようなアレンジメントと、細長いオアシスの側面と前面に切り花を挿し、全体の形を三角錐状に仕上げた2種類が見られた (図2 B)。価格は350~650ルピーであった。

カトマンズのフラワーズデコレイターにおいて切り花を購入した際にラッピングされなかったことや、花束をほとんど確認できなかったことから、切り花から花束を作って贈る習慣はあまり根付いていないと推察される。しかし、ホテルやレストラン、日本大使館では花瓶に活けられた切り花が見られ、インテリアとして花が飾られていた (図3)。

これらから、切り花はアレンジメントなどの飾り物として使われることが多いと考察した。また、日常的に切り花を大量に使う場面は見られなかったこと、切り花を扱う店舗がフラワーズデコレイターと呼ばれていたことから、ネパールのフラワーズデコレイターは、日本の生花店と同様に、宗教行事などの切り花を大量に必要とする機会に販売したり、その際にアレンジメントなどの装飾を請け負うことで生計を立てていると推察される。

b. 切り花卸し市場: United Flora

表1. 販売地別の各品目の価格 (ルピー/本)^z

品目	カトマンズ		ポカラ
	市場	小売り	小売り
カーネーション	10	20	30
ガーベラ	8	20	30
グラジオラス	8~10 ^x	20	—
スターチス (束) ^y	— ^w	100	—
バラ	4~10	25	30
ユリ	—	150	—
リコリス	—	20	—

z: 調査した2014年9月26日のレートは0.90円/ルピー。

y: スターチスは10本ほどの束で売られていた。

x: 市場では最低価格と最高価格が明示されていた。

w: 今回調査した場所では確認できなかった。

カトマンズの生花小売店であるフラワーズデコレイターには Floriculture Association Nepal という組合があり、これに属している約50の小売店が、卸し市場である United Flora から切り花を仕入れている (図4 A)。ここには毎朝カトマンズ近郊の村で栽培された切り花が出荷されてくる。また、冬期には近郊の村のみでは切り花が不足するため、温暖な南部のタライ平野やインドから仕入れを行っている。卸し市場を管理する Global Flora 社のオフィスはネパールで唯一の切り花を貯蔵する冷蔵貯蔵庫を備えていた (図4 B)。

ホワイトボードには当日の各品目の取引価格が書かれていた (図4 C)。例えば、バラは4~10ルピーで卸され、小売りでは25~30ルピーで販売されており、15~26ルピーの利潤上乘せが見られた (表1)。カトマンズではカーネーションとグラジオラスが最も需要が多い切り花であるとのことであった。また、ここでは切り花だけでなくラッピング資材、リボン、オアシスも販売されていた (図4 D)。

c. ナーサリー: New Sun Flower Nursery

カトマンズのナーサリー New Sun Flower Nursery では鉢花と苗物のみが販売されており、切り花やアレンジメントは取り扱っていなかった (図5)。ここでは種子を仕入れて育苗し、苗を販売するという販売形態であった。マリーゴールドの苗では、花が開花しているものは30ルピー、開花前のは15ルピーであった。種子はパンアメリカンシード、ゴールドスミット、サカタ、ミヨシなど日本を含む世界の種苗会社から購入していた。カトマンズのナーサリーで育苗されたマリーゴールドの苗はネパール各地に出荷される。東部はピラトナガル、西部はネパールガンジ、南部はナラヤンガートを含む

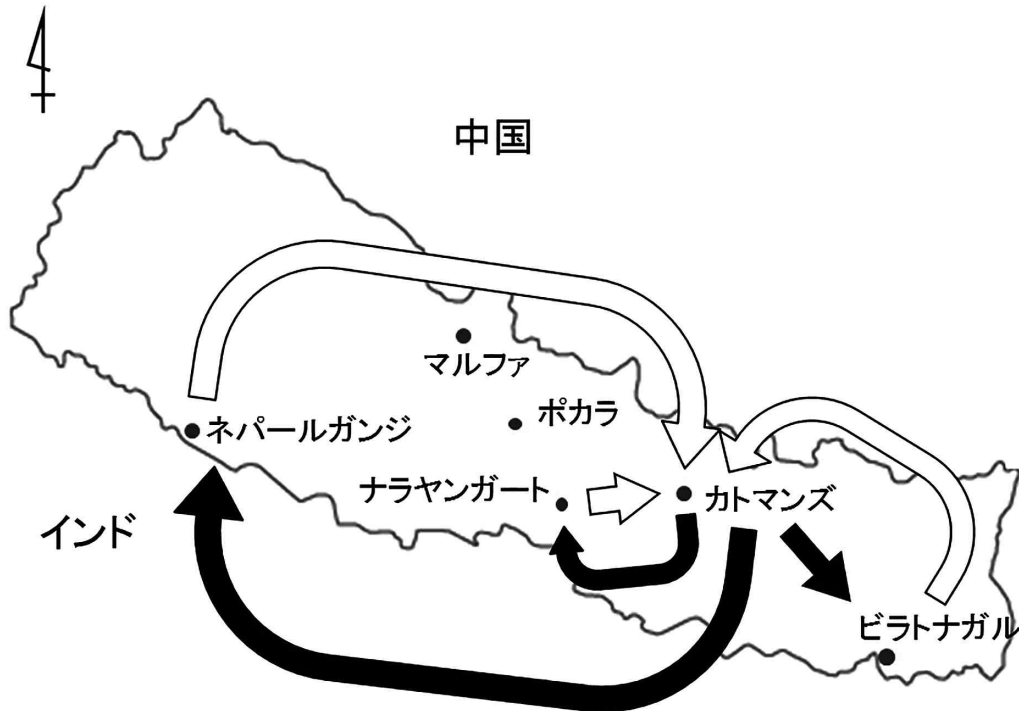


図1. 調査地とマリーゴールド苗の流通経路
 黒矢印は夏期のマリーゴールド苗の流通経路
 白矢印は冬期のマリーゴールド苗の流通経路

チトワン郡まで出荷されているとのことであった。調査した夏期には、高温のためにマリーゴールドを育苗できない南部の都市に出荷されていた。なお、チトワン郡まで出荷されたマリーゴールドの苗は60ルピーで販売されている。逆に冬期には、ネパールガンジやナラヤンガートなどインド国境に接する低標高の暖かい地方で育苗されたマリーゴールドが、カトマンズに出荷される(図1)。また、国内で育苗して販売するだけでなく、国外から苗を輸入する場合もある。例えばアジサイでは、インドの西ベンガル州カリンポンから出荷されてきた苗が、カトマンズのナーサリーからポカラのナーサリーに再度出荷されていた。

(2) ポカラ

ナーサリー：Rakshya Nursery

ポカラの Rakshya Nursery では今回調査したなかで唯一、切り花と鉢花の双方が売られていた。切り花はバラ、ガーベラ、カーネーションが各30ルピーで販売されていた(表1)。開花したアジサイ鉢花が1500ルピー、開花前のものが600ルピーで販売されていた。

また、ここでは本調査で唯一、花束の販売を確認した(図6)。ポカラは有名な国際観光都市で、多数の外国人観光客が滞在しており、花束の需要があ

るためと推察される。花束はすでにラッピングされた状態で、内容は約25cmの赤いバラ2本、約30cmの赤いバラ2本、約40cmのピンクのカーネーション2本、約50cmの葉物が入っており、価格は200ルピーであった。日本の花束のように長さをほぼ揃えたものとは異なり、側面から全ての花が観賞できる花束であった。また切り花の切り口にウェットペーパーなどは巻かれておらず、露出していた。

以上のように、人口約300万人を超える首都カトマンズ⁵⁾では、高い花卉需要があるため、卸し市場、ナーサリーから小売店のフラワーズデコレーターまでの流通構造が確立していた。一方、ポカラでは切り花の卸し市場を確認できなかった。人口約30万人のポカラ⁶⁾では需要が限られるために、卸し市場から小売店に至る流通構造が確立していないと考察される。これは、カトマンズのナーサリー New Sun Flower Nursery では鉢花と苗物のみが、フラワーズデコレーターでは切り花のみが販売され、分業体制が確立していたのに対して、ポカラの Rakshya Nursery では切り花と鉢花の双方が売られていたことから裏付けられる。

2. 品目

(1) マリーゴールド

今回訪れたいずれの都市においてもマリーゴールドが見られた。頭状花序のみを切り取り、糸でつなげた「マラ」と呼ばれる飾り物が大半であったが、家の軒先や、鉢花としても植栽されていた。また、カトマンズ、ポカラ双方のナーサリーでマリーゴールドの苗が他の品目よりも数多く見られた。「マラ」は宗教の祭りや神仏像への供え物として使われていた(図7A)。「マラ」は歓迎も意味するため、来訪者の首にかけられる習慣もある。マルファでは、訪れた際に「マラ」ではなかったが、15cm程度の切り花のマリーゴールドが手渡された。収穫祭のダサインでは「マラ」を車に飾るとのことであり、宗教的な祭礼にもこの花がふんだんに使われている⁵⁾⁶⁾。町のフラワーズデコレーターだけでなく、「マラ」のみを店先で作って販売している露店も見られた(図7B)。マリーゴールドだけでなく他の花を使った「マラ」も販売されていた。露店での価格はサイズにより20~100ルピーであった。

マリーゴールドはヒンズー教にとって永遠や健康を象徴する花であり、宗教と関わりが深い花である。マリーゴールドの利用は頭状花序にとどまらず、根は便秘に、葉は化膿に、汁液は風邪の薬としても使用される現地住民にとってなじみ深い植物である⁶⁾⁷⁾。日本ではキクが葬式などの冠婚葬祭に使われる最も需要の多い花であるように、ネパールではマリーゴールドが最も需要の多い花であった。道の舗装や道路網などのインフラ整備も整わない環境であるにも関わらず、前述したナーサリーでは季節毎に育苗できない地域へマリーゴールドの苗が出荷されていることから(図1)、周年での高い需要があることが明らかである。マリーゴールドの「マラ」は容易に乾燥してドライフラワーとなる。長期間観賞が可能であるため、ドライフラワーとして利用されている「マラ」もあった。しかし、周年の高い需要があることから、消費者はドライフラワーの「マラ」よりも生花の「マラ」を求めていると推察される。

(2) アジサイ

アジサイの認知度は高く、ネパール語では「アングサラー」と呼ばれ、どの都市でも地植えと鉢植えのアジサイが見られた。カトマンズではホテルやレストランの商業施設と New Sun Flower Nursery, カトマンズからチトワンへの道中の休憩場所、チトワンではネパール農林大学大学構内、ポカラでは Rakshya Nursery, そして最も辺境の地であるマルファ(標高2660m)でも民家で鉢花を確認した

(図8)。ネパールに自生するアジサイ⁸⁾⁹⁾は存在するが、商業的に利用されているところを見ることはなかった。また切り花は扱われていなかった。開花時期は4~5月という認識が一般的であった。確認した花色は全てピンクで、花序型は手毬咲のみであった。しかし、カトマンズ、ナラヤンガート、マルファの住民からは青色や額咲のアジサイも見たことがあるという返答が得られた。ヒンズー教では赤やオレンジは火を表す色として尊ばれているため、マリーゴールドと同様に暖色系のピンクの花色が好まれていると推察される。

(3) ユリ

ユリにはネパール語の呼称が確認できず、「リリー」と呼ばれていた。認知度はとても低く、花卉産業従事者以外では誰も知らなかった。ポカラのトリブヴァン大学プリティヴィ・ナラヤンキャンパス(Prithvi Narayan Multiple Campus)構内のアンナプルナ自然史博物館には、ネパールユリ(*Lilium nepalense*)の絵が展示されていたが、そこを管理する学生はユリを見たことがないとのことであった。アジサイと同様にネパールに自生するユリがネパールユリを含めて5種⁹⁾報告されているが、商業的に利用されているところを見ることはなかった。ポカラの Rakshya Nursery の店長はユリを認知していたが、取り扱っていなかった。ユリの切り花が出回る時期は5~7月の雨季であり、結婚式の車の装飾などに利用するとのことであった。一方、カトマンズのフラワーズデコレーターには切り花が販売されていた。価格は150ルピーで、他の花と比べると高価であった。花色は全てピンクで、白色のユリは取り扱っていなかった。Global Flora 社のオフィスの話では、白色よりもピンクの色のユリの需要が多く、他の切り花と同様にカトマンズ近郊の村で栽培されているとのことであった。欧米では白は純潔を意味する色であり、キリスト教社会では白色のユリが珍重されている。しかし、ネパールにおいて需要の多いユリの花色は、アジサイと同様にピンクであった。ヒンズー教では白色が死を意味することから敬遠されていると推察される。

おわりに

カトマンズにフラワーズデコレーターが現れたのは15年ほど前とのことであり、花卉産業は成り立っているが、その歴史はまだ浅い。切り花農家やナーサリーは他国の種苗会社から種子を購入しており、



図2. カトマンズ市内のフラワーズデコレイターの様子

- A. 店外に置かれたバケツに活けられた切り花
- B. 三角錐状に整えられたアレンジメント



図3. カトマンズ市内のホテルにて見られた活け花



図4. カトマンズ市内の切り花卸し市場 (United Flora)

- A. United Flora の外観
- B. ネパール国内で唯一の切り花を貯蔵するための冷蔵貯蔵庫
- C. 取引価格が書かれたボード
- D. 売られていたラッピング資材



図5. カトマンズ市内のナーサリー
(New Sun Flower Nursery)

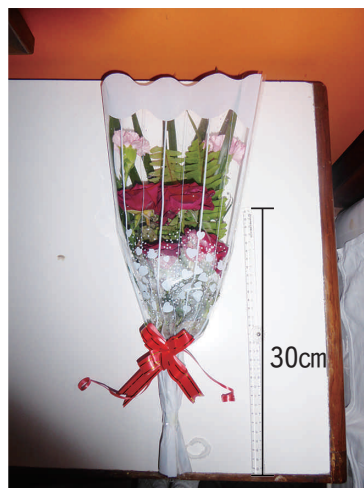


図6. ポカラにて購入した花束



図7. カトマンズ市内で見られたマラ
A. ガネーシャ像に供えられていたマラ
B. 露店で売られていたマラ



図8. マルファにて見られたアジサイの鉢花

自国に花卉を育種する種苗会社はない。国立の研究機関でも花卉は扱われていない。今回の調査では販売と流通に関する調査に留まり、切り花生産者や消費者については調査していない。ネパールにおける花卉産業と花卉文化への理解をさらに深めるためには、生産者と消費者についての調査が必要である。

謝 辞

本研究は2014年度信州大学農学部ネパール農業実習において実施した。実習は日本学生支援機構の平成26年度海外留学支援制度（短期派遣 短期研修・研究型）および信州大学知の森基金「信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための学生への短期海外活動支援」の助成を受けて行った。信州大学農学部グローバルデスク中村亜紀子氏には、実習出発前の事前学習から帰国後の報告書の作成まで多大なご支援を頂いた。また、ネパールでの聞き取り調査ではJeevan K.Thapa氏（SUBARU TRAVEL NEPAL）のご協力を頂いた。ここに記して謝意を表する。

引用および参考文献

- 1) 外務省
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nepal/data.html#section4
- 2) Nepal Agricultural Research Council（ネパール農業研究評議会）
http://www.narc.gov.np/narc/index.php
- 3) 南 峰夫・氏原暉男・根本和洋：ネパールにおける新大陸作物の収集とその評価。信州大農紀要。35：37-43。1998.
- 4) 根本和洋・B. K. Baniya・南 峰夫・氏原暉男：ネパールにおけるアマランサス研究。信州大農紀要。34：49-58。1998.
- 5) Intensive Study and Research Center：District and VDC Profile of Nepal-2014/15. BookArt Nepal. Kathmandu. pp.409, 677. 2014.
- 6) Majupuria, K. C.. 西岡直樹訳：ネパール・インドの聖なる植物。八坂書房。東京。pp232。1996.
- 7) Narayan P. M.：Plants and People of Nepal. Timber Press. Portland. pp42, 448, 449. 2002.
- 8) Polunin, O. and A. Stainton：Concise Flowers of the Himalaya. Oxford University Press. Delhi. pp51, 153, 155. 1987.
- 9) Raskoti, B. B. and R. Ale：Himalayan Flowers of Nepal. Himalayan MapHouse. Kathmandu. pp101, 110. 2012.

Present Situation of Floral Industry and its Cultural Background in Nepal

Toshiki YASUI, Kazuhiro NEMOTO*, Mineo MINAMI* and Yoshikuni KITAMURA

Department of Food Production Science, Faculty of Agriculture, Shinshu University

*Department of Sciences of Functional Foods, Graduate School of Agriculture, Shinshu University

Summary

The present situation of floral industry was investigated by interviews with staffs of Flowers Decorator and Nursery at Kathmandu, Pokhara, Marpha and Narayangadh in Nepal, Sept. 2014. Item of flowers, their prices, sales form and distributing channel were investigated. Established floral industry exists only in Kathmandu where more than three million consumers are living. With regard to marigold (*Tagetes* spp.), hydrangea (*Hydrangea* spp.) and lily (*Lilium* spp.), their familiarity, intended use and preference were surveyed. The most important flower item is marigold combined with Hinduism. Hydrangea was preferred and found everywhere but lily was not familiar at all.

Key word : floral industry, flowers decorator, Hinduism, Nepal, nursery,